

長谷川信子 (2007) 「日本語の受動文と little v の素性」 *Scientific Approaches to Language*, No.6., pp. 13-38. 神田外語大学, 言語科学研究センター.

日本語の受動文と little v の素性*

長谷川 信子

神田外語大学

受動文は、生成文法の初期から、理論の変遷と共に常に考察されてきた構文であり、それだけ、統語理論のあり方の本質と関わる現象と言える。受動文の分析は、GB 理論においては、名詞句移動と格の関係について大きく理論的發展に貢献したが、語彙情報と統語構造の関係が GB 理論ほど明確でなくなったミニマリストの枠組みにおいても、再度検討される必要がある。本論文では、GB 理論の枠組み内で提示された Hasegawa (1988)の受動文の分析を、受動述語を機能範疇の一つと捉えて、そこでは扱うことが難しかった所有受動文も含め發展させる。日本語の4つの異なったタイプの受動文(直接受動文、間接受動文、所有受動文、尊敬受動文)は、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b) の「機能範疇には[±外項][±目的格] 素性の組み合わせの違いにより異なった4つのタイプが存在する」との主張から、その存在が予測でき、その構造と派生が説明できることを示す。

1. はじめに

受動文は、生成文法理論研究の初期から常に考察され続けてきた構文であるが、それはとりもなおさず、その構文の分析にその時々々の理論のあり方が最も端的に表されてきたからである。本節では、GB 理論までの受動文の分析の変遷を簡単に振り返り、D 構造の役割をミニマム(もし

* 本論文の内容は、第3回 Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL) (Harvard 大学, 2005年7月)、および Lexicon Study Circle (&津田塾大学言語文化研究所研究会) (東京大学駒場キャンパス, 2006年5月)での口頭発表を發展させたものである。参加者の方々から貴重なコメントを頂戴した。TEALでの発表は Fukuda (2005)へのコメンテータとしての発表だったが、それは Hasegawa (1988)を Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)の枠組みで考察しなおす機会となり、TEALで発表する機会を与えて下さった James Huang 氏に感謝したい。また、Shin Fukuda 氏 (Fukuda (2006)の著者) と竹沢幸一氏との討議は大変有益であった。

くは皆無)に抑えるミニマリストの枠組みでの、受動文の扱いとその方向性を示し、第2節以降の考察につなげたい。

受動文は常に、それと対応する能動文との関わりで考察されてきた。例えば、特定の構文を特定の規則により派生させた標準理論では、受動文の(1a)を対応する能動文(1b)から、述語の形態を変え、主語と目的語の位置を変換させ、前置詞 *by* を導入するといった「受動変形規則」により導くというような分析が提示された。

- (1) a. The glass was broken (by Mary).
b. Mary broke the glass.

GB 理論においては、受動文は上昇構文と並び、A 移動現象を最も端的に示す構文として扱われ、(1a)を(1b)から直接的に変形させることはしないものの、能動文の述語の項と格に関わる特性を変化させ、受動文の主語を能動文の目的語の位置から移動させる分析が広く採用された。

しかし、GB 理論内でも、能動文と受動文の動詞の形態と性質をどう捉えるかによって分析は異なる。GB 初期 (Chomsky 1981) では、受動文に現れる述語は、統語構造に挿入される以前に、レキシコン部門において、-en に代表される受動形態素が付与され、それと同時に、能動態述語が本来保持していた「目的格付与」「外項付与」の能力を失うと分析された。その結果、受動文では、統語部門の出発点である D 構造においては、内項としての名詞句は、補部の位置に生成されるものの、その位置では目的格を受けられないために、他の格 (例えば、主格) を受けられる主語位置へ S 構造までに移動する。また、能動文の主語となる外項は、本来の外項位置には生成されず、付加詞に格下げされる。つまり、(2)にみられる派生である。

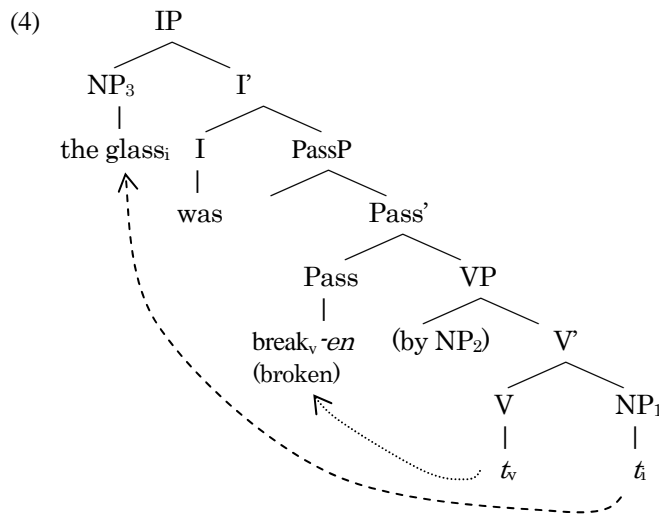
- (2) a. (D 構造) [e] was broken the glass (by Mary).
b. (S 構造) The glass_i was broken t_i (by Mary).

この分析では、能動文と受動文の対応は、統語構造以前の述語の情報と形態を司るレキシコン部門に委ねられ、S 構造も含め統語構造上にその

対応が明示的に示されているわけではない。さらに言えば、(2)の派生は、(3)のような非対格構文の派生と酷似しており、統語構造の観点からは、受動文(1a)と能動文(1b)の対応は非対格自動詞文(3b)と他動詞文(能動文)(1b)の対応と大差ない。

- (3) a. (D 構造) [e] broke the glass.
 b. (S 構造) The glass_i broke t_i.

それに対し、Hasegawa (1988)、Baker, Johnson, and Roberts (1989)などでは、受動形態素-en 自体を統語構造上の主要部と捉え、動詞は、能動文でも受動文でも「同じ」項構造、格付与能力を持つものとした。すなわち、能動文と受動文の違いは、動詞そのものの性質によるのではなく、その動詞の現れた統語的環境の違いによる。詳細は分析により多少異なるが、受動文の述語は、その上位の主要部としての受動形態素-en の補部として生成されるが、能動文にはそのような主要部の存在がない、と考えるのである。(4)は、Hasegawa (1988)で提示された分析である。



ここでは、break は能動態の場合と同様、D 構造では、内項として NP₁ を、外項として NP₂ を持つ。受動文は、-en を主要部とする範疇（ここ

では、Pass(ive)) が break を主要部とする VP を補部として取り、さらにその最大範疇 PassP が Infl の補部となる。このままでは、break は能動文同様、内項の NP₁ に格を与えることとなる筈であるが、-en の存在とその性質が、それを阻止する。つまり、-en には、レキシコンで受動述語が形成されるとした上記の分析と同様、格と意味役割を吸収する性質があり、それを満たすために、動詞 V が -en へ移動し、結果として、内項の NP₁ が主格を得るために IP の主語位置 (NP₃) へと移動するのである。

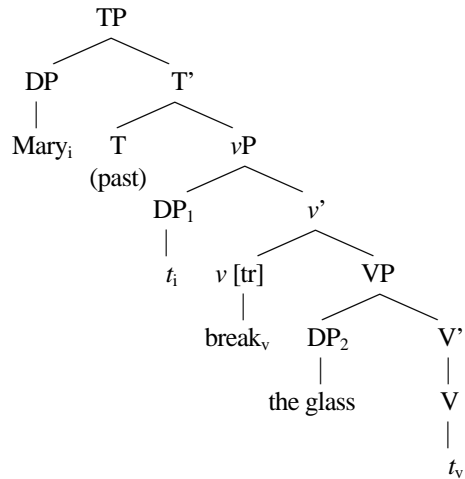
このように、GB 理論の枠組みでは、受動文は、-en の存在により、動詞の外項付与と目的格付与に関わる能力が抑制され、結果として、目的語位置の名詞句 (内項) が主語へと移動すると分析された。そして、英語に関する限り、-en を(2)の分析のようにレキシコンでの語形成で付随させるか、(4)のように統語的な主要部とするか、の違いは、記述的には大きな違いはもたらさない。

しかし、Hasegawa (1988)で詳しく論じたが、日本語の受動構文のように多様なタイプも英語の受動文と同時に分析することを考えると、(4)のように、受動形態素を統語的主要部として扱う分析の方に利点がある。つまり、受動形態素 (受動述語) のラレには、幾つかの変種があり、それが統語的に動詞との編入を受けることにより異なる受動文を派生する、と考えるのである。この「受動文には、受動形態素が独立した述語として関わっている」との方向性は、統語現象の多くが機能範疇との関わりによって説明できるとする理論の方向性を先取りするものである。

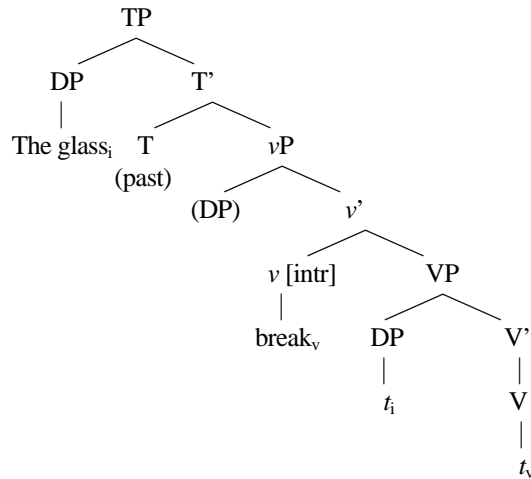
近年の述語の概念意味と統語構造との関係についての研究を考慮すると、能動文と受動文の対応に見られる、述語の外項付与および目的格付与能力は、個々の述語の特性ではなく、それらを司る機能範疇 (little v) の素性によるとの考え方が採用されてきている。GB 理論ではレキシコンでの対応と考えられてきた自動詞と他動詞の対応でさえ、機能範疇 little v を用いて統語構造により捉える方向が打ち出されてきており (cf. Chomsky 1995, Collins 1997)、他動詞文(1b)と自動詞文(3b)も同じ VP を持つが、その上位の little v の特性が異なるためにそれぞれ(5a)(5b)のような構造と派生を持つと分析するのである。つまり、次節の(6)(7)で述べるが、

他動詞文の(5a)には他動詞用の little v ([tr]と表示) が、非対格自動詞文の(5b)には自動詞用の little v ([intr]) が関わっていることが自動詞と他動詞の違いを生み出すのである。

(5) a. Mary broke the glass. (= (1b))



b. The glass broke. (= (3b))



この理論的枠組み内では、受動文と能動文の対応も当然統語構造の観点から捉えることが期待される。実際、Chomsky (2001)では、(3)のよう

な自動詞文も受動文も共に統語的には同じような性質をもつphase (weak phase) を形成するとしている。¹ この方向性が理論上も望ましいものだとすると、問題は、能動文と受動文の対応を如何に説明するかだけでなく、受動文と自動詞の違いをどう捉えるか、である。確かに、受動文も自他対応を持つ自動詞も、「目的格を持たず」「内項の要素が主語位置へと移動する」という点では、共通の性質を持つわけであるが、ほとんど全ての他動詞が受動文を形成できるのに対し、他動詞と対応関係にある自動詞は意味的にも限られる。つまり、受動文には受動文のみと関わる範疇の存在が、たとえ、自他対応と関わるlittle v範疇を想定する(5)を採用したとしても、必要になるのである。

以下では、第1節の(4)で示したGB理論内での分析は基本的に正しいと仮定し、それを受動述語についても(5)のような自他の対応に関わるlittle v範疇と同様の範疇を想定する枠組みで捉え直す。第3節以下では、日本語の受動文を扱い、受動述語のラレについても little v 範疇同様、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)で主張した「目的格」と「外項」素性の値の異なるタイプを想定することで、日本語に見られる異なるタイプの受動文が可能となることを示す。

2. little v と英語の受動文

動詞の自他の対応関係を、上記(5)で示したように構造で捉えようとする分析においては、自動詞と他動詞の違いは、各々の動詞の項構造の違いとしてあるのではなく、(5)でも|[intr]で示したが、機能範疇 little v の性質の違いにより捉える。Collins (1997)では、little v を Burzio の一般化(6)の具現として捉え、他動詞用の little v と自動詞用の little v (Collins では TrV カテゴリー) では、(7)のように素性が異なると提案されている。
| |

(6) Burzioの一般化

外項を付与しない述語は目的格を付与できず、目的格を付与しな

¹ phase は「位相」と日本語に訳されているようだが、本稿ではそのまま phase という用語を用いる。

い動詞は外項を付与できない。

(7) little vの素性

- a. 他動詞：[+外項] [+目的格]
- b. 非対格自動詞：[-外項] [-目的格]

すなわち、**break** などの述語が他動詞となるか非対格自動詞となるかは、その上位の機能範疇 **little v** がどちらのタイプであるかによるとるのである。

この考え方に従って、受動文を捉えるなら、受動文と関わる機能範疇の存在が予測され、その性質は、「Burzioの一般化」に従い、非対格自動詞同様、外項を与えず、目的格を与えないものとなろう。つまり、受動形態素-enは非対格自動詞としての **little v** の一つのタイプである、ということになる (cf. Bowers 2002, Fukuda 2005)。実際、Chomsky (2001)では、受動述語は分詞(participial)を形成する主要部 **Prt** が、動詞の本体と内項を含むカテゴリー (**VP**) を補部に取り、非対格自動詞と同じく **weak phase** を形成するとしている。そこにおいて、受動述語の **Prt** が非対格自動詞用の **little v** (7b)と同じ性質を持つ範疇としているかは定かでないが、それらが共に、**strong phase** を形成する (7a)の他動詞用の **little v** と対比されていることを重視すれば、**Prt** は-en というような形態を保持しているが、基本的に(7b)と同じ非対格的な機能範疇として扱われていると思われる。

しかし、受動形態素-enを(7b)の非対格自動詞用の **little v** と同様の要素と考えることはできない。他動詞と非対格述語の対応は、述語の意味の観点からは状態変化を伴うタイプに限られるが、受動述語は述語の意味タイプとは無関係に他動詞から派生されるのである。この一般化を捉えることが、受動文を統語操作により分析することの第一義的な動機であり、たとえ、受動文と非対格述語が「似ている」としても、この一般化は無視できない。

break などの状態変化述語(8a)は、受動述語(8b)と非対格自動詞(8c)が併存するが、それらは同義ではない。

- (8) a. Mary broke the glass.
 b. The glass was broken (by Mary).
 c. The glass broke (*by Mary).

受動述語を持つ(8b)には、対応する他動詞に見られる動作主を *by* の句などで明示することができるが、非対格自動詞の(8c)では、動作主の存在が許されないばかりでなく、示唆もされていない。受動文には動作主の存在が暗示されていること、基体の動詞は「他動詞」であること、の2点を(7)のような *little v* の素性の観点から考えるならば、受動文には、(7a)の他動詞用の *little v* が関わり、そこに *-en* が組み込まれることで、結果としては、(7b)の非対格用の *little v* と同様の素性を持つ述語構造が得られると考えざるを得ない。つまり、述語構造として、(7)のような *little v* 素性の考え方を採用した上で、GB 理論内の分析であった(4)のような派生を援用することが、必要になるのである。

課題を(9)にまとめる。

- (9) a. Passive の *-en* が他動詞 ([+外項] [+目的格]の *little v* を持つ述語) としか共起しないことをどのように保証するか?
 b. 他動詞は *-en* が付加することにより、結果として非対格述語の *little v* と同様の[-外項] [-目的格]の性質を持つことになることを、どのように保証するか?
 c. 受動文には非対格文にはない、他動性があることをどう保証するか?

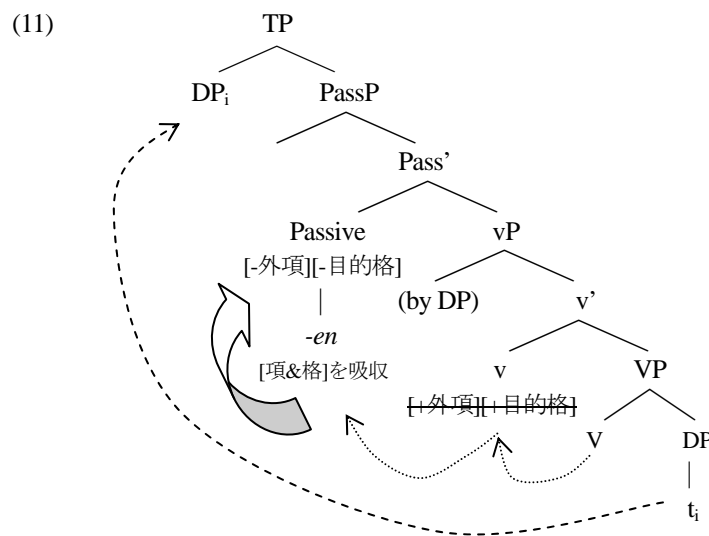
これらの課題は、既に、GB 理論内での *-en* の「外項と格を吸収する要素」としての位置づけを踏襲すれば、ほぼ「解決」できることである。つまり、(10)のような提案である。

- (10)a. *-en* は独立した述語的要素 (ここでは *Pass*) であり、その補部に他動詞 (i.e., *vP*[+外項] [+目的格]) を要求する。
 b. *-en* のカテゴリーは [+N] だが、補部の主要部の *little v* に *incorporate* (編入) する。その際、*-en* は *little v* の素性[+外項] [+

目的格]を absorb (吸収) し、編入の結果得られた範疇は非対格の little v と同様の素性[-外項][-目的格]を持つ。結果として、PassP と vP は一つの weak phase を作る。

- c. 受動文は、他動詞の vP を内包することにより、非対格 little v とは異なり意味的には「他動性」を示す。

この提案に従って得られる派生は(11)である。²



この分析は、GB 理論の枠組みで Hasegawa (1988)で提示された分析(4)を、little v 素性の考え方を導入して再提示したものである。-en の持つ、外項と格を吸収するとの性質は、他動詞用の little v が-en に編入されることによる。編入の結果得られる範疇は非対格自動詞の持つ little v 素性と同様の素性を持つのである。結果として、目的語は VP 内では格を受けられず、VP (及び vP と PassP) を越えて TP まで移動し、他動詞 vP の外項は付加詞に「格下げ」される。目的語が VP 内部から移動するという事は、vP (および PassP) は非対格 vP 同様 weak phase を形成している

² ここで考察の対象となるのは、PassP 以下の部分であり、目的語が PassP を越えて移動することである。本稿では、PassP 上部の部分は簡略し TP としておき、be 動詞や時制などは考察の対象とはしない。

ことを示す。

この分析が受動文の特性を捉えているとすると、Passive 述語は、(i)その補部に特定のタイプの little v を選択すること、(ii) little v の編入により、新たな little v 素性を持つ範疇となること、を許す述語ということになる。以下では、日本語の受動文の Passive 述語ラレも同様の性質を持つこと、しかし、ラレの動詞としての性質から、英語の Passive 述語とは異なり、little v 素性に許される4つのタイプを全て具現できることを示し、それが、日本語の4つのタイプの受動文 (i.e., 直接受動文、間接受動文、所有受動文、尊敬受動文) を可能にすることを論じる。この結論は、筆者による自他の対応や使役文現象を扱った little v 素性に関する一連の研究 (Hasegawa 2001, 2004a, 2004b) の主張を、受動文の分析からも支持するものである。

3. 日本語の受動文

3.1 直接受動文と間接受動文

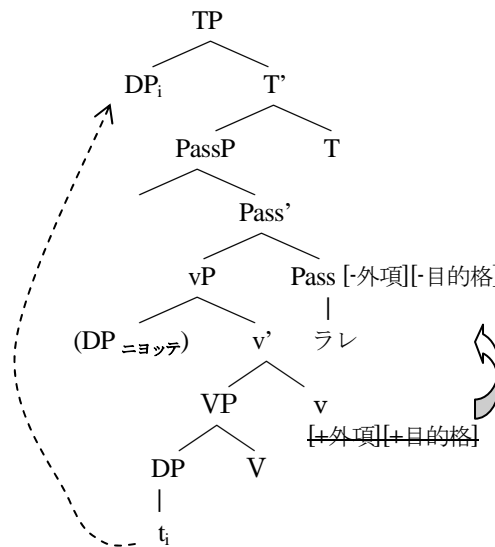
日本語には英語と異なり、複数のタイプの受動文があることは生成文法の初期から繰り返し討議されてきた。(cf. Kuno 1973, 井上 1976, Howard and Niyekawa-Howard 1976, Kuroda 1979, Hasegawa 1988, Kubo 1989, Shibatani 1990, Kitagawa and Kuroda 1992, Hoshi 1999, Fukuda 2005, etc.) 特に、日本語には、能動文と対応する(12)のような「直接受動文」の他に、(13)のような「間接受動文」(もしくは「迷惑受け身」)が存在することは、よく知られている。³

- (12) a. 花子が (父親に) 叱られた。(父親が花子を叱った。)
b. 新聞が (若者に) 読まれない。(若者が新聞を読まない。)
- (13) a. 花子_iが *(太郎_jに) 夜中に(自分_{i/j}の部屋で)ドラムを叩かれた。
b. 山田さんが *(子供に) 泣かれた。

³ 直接受動文も、動作主に二格を用いるかニヨッテを使うかで、異なるタイプの受動文となるとの主張がある。(cf. Kuroda 1979, Kitagawa and Kuroda 1992, Hoshi 1999, Fukuda 2005, etc.) しかし、本稿では、それらは、共に英語の受動態に対応するタイプとして扱う。また、Kubo 1989, Shibatani 1990 で討議された所有受動文については、別のタイプとして 3.3 で扱う。

これらの2つのタイプの受動態の分析には、これまでも様々な論考がなされてきているが、ここでは、Hasegawa (1988)に従い、「直接受動文」は英語の受動文(11)と基本的には同じような構造により派生すると考える。すなわち、(14)のような派生である。

(14)



つまり、直接受動文に見られる受動述語ラレは、[+外項][+目的格]素性を持つ他動詞vPを補部に取り、vはPassのラレに編入する。それにより、外項は「格下げ」され付加詞になり、目的語は格を受けられず主語位置へ移動する。すなわち、vとPassラレが編入して形成される主要部は非対格タイプの[-外項][-目的格]素性を持ち、それによるphaseはweak phaseとなる。⁴

一方、(13)のような間接受動文は、生成文法初期から受動述語ラレが文的範疇を補部に持つ構造が想定されてきた (cf. Kuno 1973, Howard and Niyekawa-Howard 1976)。その大きな理由は、(13)から分かるよ

⁴ 具体的なメカニズムについては詳細な考察が必要だが、Passive 述語がその補部である little v と編入される際、英語では、-en の名詞的性質により、little v の外項と格は吸収される。日本語の場合はラレは名詞というより動詞であると考えられ、ラレが-en 同様、外項と格を吸収するとは考えにくく、Hasegawa (1988)では、その性質を述語とラレの統語レベル

うに、間接受動文には、補文の述語の項が全て表出することが求められるだけでなく、その補文の出来事によって影響を受ける人の存在がラレの表出と共に必須項として表出するからである。そして、主語指向の「自分」は、動作の主語だけでなく、影響を受けた人の両方に解釈できるのである。例えば(13a)は、「太郎が夜中にドラムを叩く」という出来事によって、「花子が影響を受けた」ことを表し、その出来事が起こった場所は、動作主である「太郎」の部屋の可能性も、影響を受けた「花子」の部屋の可能性もある。こうした事実は、ラレが影響を受けた人「花子」とその原因となった出来事「太郎が夜中にドラムを叩く」を表す補文を選択し、補文の主語に二格を認可すると考えれば、意味的整合性と同時に、派生の説明もつくのである。

ここでは、間接受動文のラレも直接受動文のラレ同様、little vの素性[±外項][±目的格]を持つと仮定しよう。被影響者がラレの外項だとすると、このラレは当然[+外項]の素性を持つことになる。ラレが格素性に対し[+目的格]を持つか否かは検討の余地があるが、Hasegawa (1988)等でも論じているが、補文の主語に与えられる二格は直接受動文に見られる後置詞のニ(ヨッテ)とは異なり、「格」であると考えられる。⁵ そうだとすると、ラレは[+目的格]の素性も持つことになり、[+外項][+目的格]、すなわち、他動詞用のlittle vの素性を持つカテゴリーとなる。この分析を(15)に示す。⁶

での義務的編入により説明した。本稿でも同様の方向を第4節で提示する。

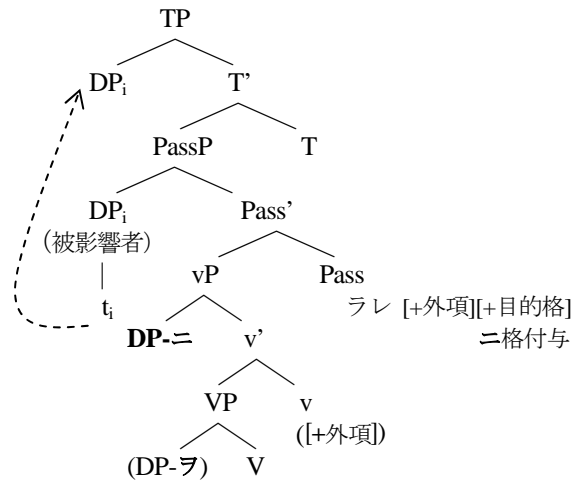
⁵ 間接受動文のニで表示される要素は、直接受動文のニ(ヨッテ)要素とは異なり、遊離数量詞のホストとなれることから、後置詞句ではなく名詞句と考えられ、この場合のニは「格」であるとの傍証となる。

(i) a.??花子は先生に3人ほめられた。

b. 花子は子供に3人死なれた。

⁶ 間接受動文の補部と成り得る述語は(13a)のように他動詞か(13b)のように非能格自動詞に限ると考えられている(影山 1993, Washio 1989-90)。この一般化が正しいとすると、[+外項]、[+目的格]素性を持つラレは、(15)で示したように[+外項]素性を持つ little v を補部にとるとの制限が必要であろう。しかし、Hasegawa (1988)、長谷川(1999)でも述べたように、この一般化には例外も多く、述語の意味と形態、意味役割のタイプなどの観点からの注意深い考察が必要である。

(15)



この分析では、Pass という範疇もその補部の vP も外項を保持しており VP 内部からの移動は観察されないことから、strong phase と考えられよう。

本稿では、上記で見てきたように、受動文と関わる機能範疇 Pass も外項の有無と格付与の有無に関わり、little v 同様、[±外項][±目的格]の素性を持つと考えてきた。ただ、英語の-en は、述語というより cliticに通じる名詞的性質から、補部の little v の[+外項][+目的格]素性を吸収し、-en (及び、-en へ編入する little v) は結果として[-外項][-目的格]として非対格 little v と同様の素性となる。それに対し、日本語のラレは、形態上は動詞であり、ラレ独自に[±外項][±目的格]素性を選択できると思われる。その結果、非対格 little v と同様の素性[-外項][-目的格]を持つ場合は、直接受動文を、他動詞 little v と同様の[+外項][+目的格]素性を持つ場合は、間接受動文を生成できると考えられる。

3.2 little v の素性： Hasegawa 2001, 2004a, 2004b

上記では、Passive 述語ラレを、little v 同様、[±外項][±目的格]という2つの素性を持つ機能範疇の一種として扱い、その素性のあり方により、直接受動文と間接受動文が得られるとの分析を提示した。第2節(特に、(7))で見てきたように、little v のタイプが非対格タイプ[-外項][-目的格]

と他動詞タイプ[+外項][+目的格]のみに限られるなら、また、受動文の Pass も、その素性の組み合わせは、little v と同じように限られるなら、受動文にもこの2つのタイプだけしか可能ではないということになる。しかし、[±外項]と[±目的格]の素性の組み合わせには、非対格と他動詞タイプ以外に、理論的にもう2つのタイプ、[+外項][-目的格]タイプと[-外項][+目的格]タイプ、が可能な筈である。

実際、筆者は、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)で、little vには、(16)に示した4つのタイプが存在し、特に、(b)の「非対格他動詞」とでも呼べる[-外項][+目的格]タイプが、(17)のような被動作主他動詞の派生には不可欠であることを論じた。⁷

(16) little v のタイプとその素性

	+外項	-外項
+目的格	(a) 他動詞	(b) 非対格他動詞
-目的格	(c) 非対格動作主自動詞	(d) 非対格自動詞

- (17) a. {風/花子} が枝を揺らした。(yur-as-ita) [原因他動詞文]
 (cf. 枝が {風/*花子} で揺れた。(yur-e-ta))
- b. 知子_iが [t_i 腰] を痛めた。(itam-e-ta) [所有者上昇他動詞文]
 (cf. 知子の腰が痛む。(itam-u))

これらの文にはヲ格をもつ「目的語」があり、また、自他対応にかかわる形態の観点からも他動詞である。すなわち、これらの述語とかかわる little v には[+目的格]素性があり、ヲ格が対象項に与えられる。しかし、これらの文の主語は「動作主」ではなく、非対格自動詞構文 (cf.の例) にも現れ得ることから、VP 内部に原因の項 (17a) や対象項の所有者 (17b) の位置から移動しが格を受けると分析できる。特に、(17b)の所有者上昇タイプは、一見、普通の他動詞のように見えるが、意味的には対応する

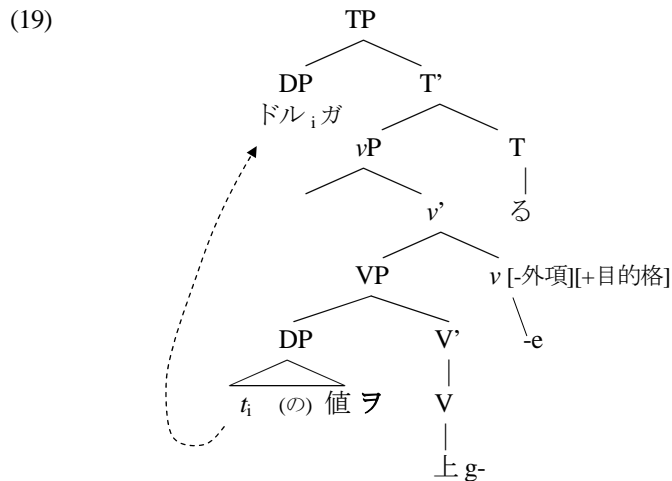
⁷ Collins (1993)が主張するように、little v の素性が「Burzio の一般化」の具現だとすると、許されるのは(7)で示したように(16a)と(16d)のみである。ここでは深く立ち入らないが、(16c)にあたる自動詞には、非対格自動詞が動作主を取る(i)のような例があたると思われる。詳しくは Hasegawa (2001)を参照されたい。

(i) a. 花子が (わざと) 動いた。 b. 京子が (故意に) 倒れた。

非対格自動詞文とほぼ同一であり、違いは目的格のヲ格が許されるか否かに求めるのが妥当であると思われる。(18)に他の例を示す。

- (18) a. ドルが値を上げた。 (ドルの値が上がった。)
 b. 朝顔が蔓を伸ばす。 (朝顔の蔓が伸びる。)
 c. 花子が火事で家を焼いた。 (花子の家が火事で焼けた。)

つまり、(16b)のタイプの little v は、他動詞 ([+目的格]) であるが、[- 外項]素性を持ち、独立した外項は生成しないことから strong phase を形成せず、主語は非対格自動詞同様、VP 内部から移動してきた派生主語となるのである。(19)には、(18a)の派生を示したが、特筆すべきは、他動詞「上げる」の対象項 (ドルの値) から、所有者 (ドル) が分離して文の主語位置 (TP 指定部) へ移動していることである。この所有者分離については、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)、長谷川(1999)でも論じたが、「象が鼻が長い」「太郎が頭がいい」といった多重主語構文や「花子はロシア語が単語が覚えられない」などの多重主格目的語構文も含め、日本語では広く観察される現象であり、(17b)や(18)でも、それが適用されている。



3.3 所有受動文

上記 3.2 で、little v 素性には、「Burzio の一般化」が予測する非対格自動詞用の(16a)と他動詞（および非能格自動詞）(16d)だけでなく、(16b)の非対格他動詞タイプ、すなわち、[-外項][+目的格]も存在することを見てきた。第 2 節および 3.1 で主張してきたように Passive 述語も little v 同様の phase 形成と関わる機能範疇であるなら、当然、直接受動文用の(16a)タイプ、間接受動態用の(16d)タイプに加え、(16b)タイプも存在することが予測される。本節では、その予測通り、(16b)の[-外項][+目的格]素性をもつ Passive 述語により、(20)のような、いわゆる「所有受動文」が無理なく分析できることを示す。

- (20) a. 花子_iが次郎_jに（自分_{i/*j}の部屋で）足を踏まれた。
b. 知子が自転車を盗まれた。
c. パソコンが（子供達によって）ディスプレイを壊された。
d. ドルが（不当に）値を上げられた。

(20)のような受動文では、主語は目的語の所有者として理解されるが、ヲ格目的語が存在することから生成文法初期には、間接受動文として分析されてきた。しかし、これらの文には、間接受動態では見られない特徴がある。先ず、(20b)(20c)(20d)から明らかのように動作主の存在が不可欠ではなく、生起した場合でも間接受動文とは異なりニヨッテを伴うことができる。そして、受動文の主語は(20c)(20d)から分かるように、人（経験者）である必要がない。また、(20a)での「自分」は受動文の主語しか指すことができず、これは、間接受動文の(13a)が曖昧性を示すこととは明らかに異なる。こうした事実を考慮すると、Kubo (1989)、Shibatani (1990)が論じているように、(20)のような「所有受動文」は間接受動態とは考えにくい。さらに、(21)(22)のデータは興味深い。

- (21) a. 子供達が先生に（3人）髪を切られた。（所有受動文）
b. 子供達が先生に（3人）叱られた。（直接受動文）
c. *子供達が先生に（3人）授業を休まれた。（間接受動文）

- (22) a. (このクラスでは) 3人の子供が先生に毎朝頭を撫でられる。
 b. (このクラスでは) 3人の子供が先生に毎朝ほめられる。
 c. (このクラスでは) 3人の子供が親に毎朝寝坊される。

先ず、(21)だが、「子供達」と関わる数量詞「3人」は、(21a)の所有受動文、(21b)の直接受動文では、ガ格動作主の「先生」を越えて生起できるが、間接受動文では、それは許されない。また、(22)では、「3人の子供」と「毎朝」の作用域の曖昧性の問題であるが、全ての文で、「3人の子供」が「毎朝」より広い作用域を持つ読み（「同じ3人の子供」が「毎朝」「頭を撫でられる／ほめられる／親に寝坊される」という読み）は存在する。しかし、逆の読み、「毎朝」の方が「3人の子供」より広い作用域を持つ解釈（「毎朝」「異なった3人の子供」が「頭を撫でられる／ほめられる／親に寝坊される」という解釈）は、(22a)と(22b)では可能だが、(22c)の間接受動文では可能ではない。⁸ こうした事実は、所有受動文は直接受動文同様、主語が目的語（近辺）からの移動を経て派生してきたことを示唆していよう。

上記の所有受動文の特徴を直接受動文、間接受動文の特徴と比較して、次頁(23)の表にまとめておく。⁹ (23)の表から明らかなように、所有受動文の特徴は、受動文にもヲ格目的語が存在していることを除けば、直接受動文とほとんど一致する。そして、上記で論じてきたように、こうした性質はPassive述語としてのラレの機能範疇としての素性から基本的に

⁸ Kitagawa and Kuroda (1992)によると、(22b)のような直接受動文では、動作主がニ格を伴うかニヨッテで標示されるかで主語（ここでは「3人の子供」）と副詞（「毎朝」）の作用域に違いがあるという。ニ格では主語の作用域が「毎朝」より広い読みしかなく、ニヨッテなら曖昧であると報告されている。（ちなみに、この観察は、注3で言及した二格直接受動文とニヨッテ直接受動文を分ける分析を支持する事実とされている。）しかし、筆者にはニ格でも作用域の曖昧性が観察できると思われる。むしろ、顕著な対比は、(22a)(22b)と間接受動文(22c)との対比であろう。(22c)は明らかに曖昧性はなく、主語が広い作用域を持つ読みしかない。

⁹ ラレにも、little v 同様、[±外項]と[±目的格]の素性に関し全ての組み合わせが許されるなら、(23)の3つの他に[+外項][-目的格]の組み合わせも可能な筈である。little v については、注7でも述べたが（より詳しくはHasegawa (2001)参照）、自他対応のある自動詞で動作主主語を取る move などの場合である。Passive 述語については、Hasegawa (1988)でも扱ったラレによる尊敬表現（尊敬受動文）がこれにあたり、それは第4節で扱う。

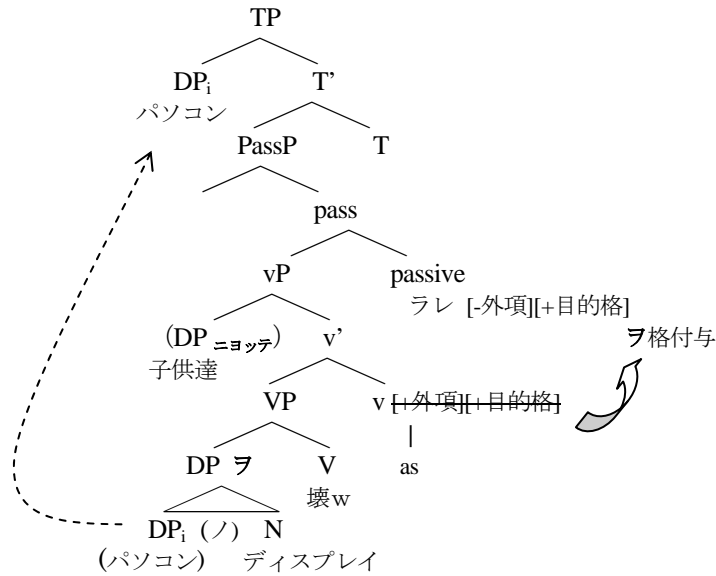
は得られると考えると、所有受動文は直接受動文とヲ格付与素性、すなわち[±目的格]が異なるが、VP内部から移動してくる派生主語を可能にする[±外項]素性については、直接受動文同様、[-外項]の値を持つと考えられよう。すなわち、(23)の表に網掛で示した[-外項][+目的格]素性 (i.e., 3.2 で論じた(16b)の非対格他動詞用の素性) を持つと思われるのである。

(23) 直接受動文、間接受動文、所有受動文の特徴

	(a) 直接	(b) 間接	(c) 所有
ヲ格目的語	No	OK	OK
派生主語	Yes	No	Yes
主語は「人」	No	Yes	No
by 動作主が義務的	No	Yes	No
ニヨッテ動作主が可	Yes	No	Yes
動作主越え数量詞 (21)	Yes	No	Yes
数量詞の曖昧性(22)	Yes	No	Yes
ラレの素性	[-外項, -格]	[+外項, +格]	[-外項, +格]

上記の考察に加え、直接受動文の(14)、間接受動文の(15)、非対格他動詞の(19)の派生を踏まえると、所有受動文、例えば(20c)、は次頁の(24)のような派生を持つと分析できる。すなわち、他動詞の vP の目的語の所有者が、(19)と同様、目的語から分離し、主語となる。この移動は(14)の直接受動文同様、VP 内部からの移動である。ということは、その移動を可能にするためには、Passive 述語と little v が編入して得られる機能範疇は weak phase を形成するということである。つまり、little v の外項は編入と同時に付加詞に「格下げ」され VP 内部からの移動の妨げとはならないのである。

(24)



4. Passive 述語： 編入の有無と Phase のタイプ

上記では、Passive 述語を phase と関わる機能範疇の一種として扱い、Passive 述語も Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)で論じた little v と同様の素性の組み合わせを持つとすることで、英語の受動文および日本語の3つのタイプの受動文の分析と派生を提示した。英語の受動文については、-en の名詞的性質（意味役割と格を吸収する）から、Passive 述語と編入される述語のタイプが他動詞用の little v である必然性があり、編入後の Passive 述語（むしろ、v-Pass 複合機能範疇）が非対格自動詞タイプの素性[-外項][-目的格]を持つことは当然の帰結であった。

一方、日本語の Passive 述語については、上記の分析が正しいとしても、もう少し注意深い検討が必要である。例えば、間接受動文(15)と所有受動文(24)の派生を比べてみよう。両者は、(23b)(23c)から分かるように、Passive 述語の[±外項]素性が異なるが、[±目的格]素性は共に[+目的格]の値で共通である。しかし、実際にラレが認可しているのは、間接受動文では補文の主語にニ格、所有受動文では補文の目的語にヲ格であり、与

える要素も格の種類も異なる。残念ながら、本論文ではこの違いを系統立てて説明することはできないが、もう一つの受動文「尊敬受動文」も考察に加えることで、受動文現象から phase のあり方に関し今後の課題が見えてくると思う。

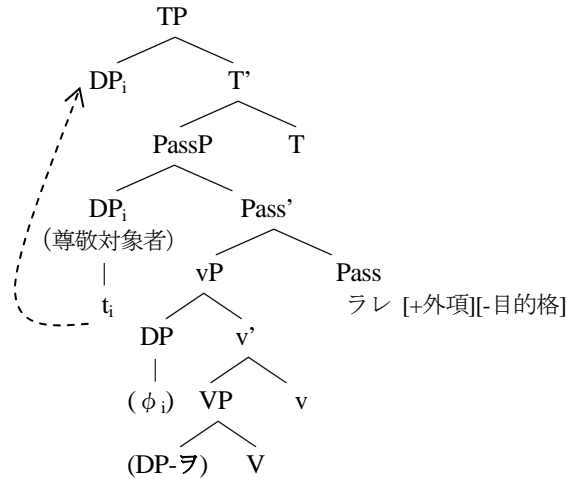
4.1 尊敬受動文と間接受動文：Strong Phase タイプ

Hasegawa (1988)では、日本語の受動文について、(25)のようなラレによる尊敬表現も受動文の一つのタイプであると論じた (Hasegawa 2006 も参照)。

- (25) a. 先生が本を書かれた。 (動作主他動詞 [+外項][+目的格])
(a.' * {私/子供} が本を書かれた。)
b. 先生が風邪で倒れられた。 (非対格自動詞 [-外項][+目的格])
c. 先生が気を失われた。 (非対格他動詞 [-外項][+目的格])

「尊敬受動文」にはラレは存在するものの、その格配列と項構造はラレのない文と同じである。しかし、尊敬受動文の主語は、常に尊敬に値する「人」([-1人称])でなければならない。この条件は間接受動文の主語への条件と似ており、ラレが[+外項]を持つことを示している。しかし、(25a)(25c)で生起しているヲ格は、ラレが付随している述語の他動性により認可されていると思われ、ラレ自身は格認可には関与していない。このことから、尊敬受動文のラレは機能範疇の素性の観点からは[+外項][-目的格]の素性を持ち、(23)の表から外れた4つめのタイプと考えると差し支えないと思われる。そうだとすると、尊敬受動文には、次頁(26)のような派生が考えられる。(26)で示した派生は、(15)で示した間接受動文とほぼ同じである。両者ともラレにより認可された主語(人)が受動文の主語となる。また、補文 vP に目的語が存在する場合は、補文の little v にヲ格を与える素性が存在すると考えられ、ラレがその認可には関わらない。両者の違いは[±目的格]素性だけであり、それは、補文の主語にニ格を与えるか否かの違いとして表出する。間接受動文の場合はニ格を与えるが、尊敬受動文の場合、それが叶わず、結果としては Passive 述語の主語と同定される空範疇が補部の主語位置を占めるのである。

(26)



上記で見たように、間接受動文と尊敬受動文（すなわち、[+外項]素性を持つラレにより派生される受動文）では、ヲ格が観察される場合は、補文の little v の [+目的格]素性が認可していると思われ、補文の VP 内からの移動は一切起こっていない。逆に言えば、このタイプのラレは、VP 内からの移動を許さない strong phase を形成し、その補部の little v もその本来の素性の効力（特に、[+目的格]素性）は失われていないのである。このことは、ラレがその補部の little v とは編入する必要がないことを意味していよう。実際、筆者は GB 理論の枠組みで日本語の受動文を分析した Hasegawa (1988)で、間接受動文と尊敬受動文では、補文の動詞のラレへの主要部移動は（統語部門では）起こっていないと分析した。little v 構造を用いた本分析でも「編入しない」とすることで、その考え方を踏襲したい。

4.2 直接受動文と所有受動文： Weak Phase タイプ

間接受動文、尊敬受動文の[+外項]タイプの受動文とは異なり、[-外項]タイプのラレを持つ受動文は、直接受動文と所有受動文である。このタイプの受動文では(23a)と(23c)の特徴が示すように、主語は、VP 内部から、直接受動文では目的語が、所有受動文では目的語の所有者が、vP および PassP を越えて主語位置 (TP 指定部) にまで移動してくる構造とな

っている。VP 内部からの移動が許されるということは、vP および PassP は phase としては weak であることを示している。このことは、ラレ自体が[-外項]であるばかりでなく、その補部の vP にも外項が存在しないことを意味する。つまり、直接受動文と所有受動文では、補部の述語 vP は、本来なら他動詞として持つ [+外項] 素性が、ラレの存在によりその本来の効力が発揮できなくなるのである。こうした「外項」に関わる素性の変化は、日本語においても、英語の受動文同様、編入によりもたらされると考えるのが自然であろう。さらに、編入に伴い、補部の他動詞 little v の格付与素性[+目的格]もその効力を失う。直接受動文では、Passive 述語の素性も(23a)で示したように[-目的格]であることから、補文の目的語が移動する。そして、所有受動文では補部 V の目的語はヲ格で現れるが、little v 自体が Passive 述語と編入することによりその[+目的格]素性も効力を失うと考えれば、ヲ格は little v の格素性ではなく Passive 述語の[+目的格]素性から受けることになると思われる。

5. まとめと課題

本論文では、Passive 述語ラレは、その補部に vP を取るが、ラレ自身 little v と同様に、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)に従い、[±外項]と[±目的格]の素性の組み合わせを取る機能範疇であることを論じた。素性の組み合わせでは4つのタイプが可能となるわけであるが、英語の-en は、その名詞的な特性により、格と外項を吸収するため、必然的に[-外項][-目的格]のタイプに限られる。しかし、日本語のラレの場合は、(27)のように4つのタイプが可能であり、その素性の組み合わせによる違いが、異なった受動文を生成するのである。

(27) Passive 述語の素性と受動文のタイプ

	+ 外項	- 外項
+ 目的格	(a) 間接受動文	(c) 所有受動文
- 目的格	(b) 尊敬受動文	(d) 直接受動文

これら4つのタイプのうち、独立した外項を取る[+外項]タイプの(a)と(b)

は、strong phase を形成し補部の little v とは編入しない。そのため、little v の[±外項][±目的格]素性はそのまま効力を残し、補部の述語が他動詞なら、その little v の[+目的格]により、目的語にヲ格を許す。それに対し、[-外項]タイプの(c)と(d)は weak phase を形成し、little v と編入することにより、little v 自体が strong phase を形成することをも阻止し、結果として、VP 内部の要素の移動を可能にする。

ただ、この分析で課題として残るのは、何故 Passive 述語の[±外項]の値がその補部 little v との編入の有無と連動するのか、という点である。その問いへの答は、おそらく、もう少し概念的なレベルでの「phase とは何か」「vP レベルの機能範疇とは如何なるものか」という問いと無関係ではないであろう。すなわち、Passive 述語はその補部に little v を取るが、その存在の有無、およびタイプの違いに関わらず、little v と共に「一つの phase」を形成すると思われるのである。その直感があるが故に、Chomsky (2001)では、英語の受動文の phase を非対格自動詞と同様に weak phase として扱っていると思われる。しかし、第2節で論じたように、(英語の) 受動文は単純には非対格自動詞と同様には扱えない。受動文が他動詞を基盤に作られていることを保証するためには、Passive 述語と little v は別の機能範疇でなければならない。それにも関わらず、Passive 述語と little v が「合体」(編入) することで、素性の上でも一つの機能範疇となり、一つの weak phase を形成するのである。

vP レベルの phase は、オペレータや語用的機能とも関わる CP という文レベルの phase とは異なり、述語の意味(命題)と密接につながる範疇である。そのレベルに許される機能範疇に自他の別と関わる little v が想定されているが、それ以外に、どのような機能範疇が可能であるか、また、それらが複数生起した場合にどのような振る舞いが見られるのか、許されるのか、など、今後の研究を待たねばならない。本論文では、そうした問いに、(i)受動態と関わる機能範疇(Pass)が存在すること、(ii)機能範疇 Pass は little v 同様の素性[±外項][±目的格]を持ち、その素性の組み合わせにより4つの異なったタイプの受動文が生成できること、(iii)Pass は little v と共同して、全体として「一つの phase」を形成するこ

と、を示した。つまり、命題レベルの phase 形成に関わる機能範疇には、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b)で提唱した素性の組み合わせが有効なのである。さらに言えば、本論文での考察は、今後も想定されるであろう（そして、実際に想定されつつある）命題レベルと関わる他の機能範疇（例えば、述語のアスペクトと関わるもの、中間構文の派生に関わるもの等はその候補になろう）が各々の間でどのような関係性を持ち、どのような phase を形成するかといった課題に対し、受動文の観点から一つの方向を示すことができたと思う。

参考文献

- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts. 1989. Passive Arguments Raised. *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.
- Bowers, John. 2002. Transitivity. *Linguistic Inquiry* 33, 183-224.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local Economy*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Fukuda, Shin. 2005. Japanese Passives as Control/Raising/ECM, a paper presented at Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, Harvard University.
- Hasegawa, Nobuko. 1988. Passives, Verb Raising, and the Affectedness Condition, *WCCFL* 7, 99-113.
- 長谷川信子. 1999. 『生成日本語学入門』東京: 大修館書店.
- Hasegawa, Nobuko. 2001. Causatives and the Role of v Agent, Causer,

- and Experiencer. In Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa (eds.) *Linguistics and Interdisciplinary Research: Proceedings of the COE International Symposium*. 1-35. Kanda University of International Studies.
- Hasegawa, Nobuko. 2004a. 'Unaccusative' Transitives and Burzio's Generalization: Reflexive Constructions in Japanese. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics, Vol 1. MIT Working Papers in Linguistics* 46, 300-314.
- Hasegawa, Nobuko. 2004b. The Possessor Raising Construction: Transitivity, Causative, and Experiencer, *Scientific Approaches to Language* 3, 35-74. Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Hasegawa, Nobuko. 2006. Honorifics. In Martin Everaert and Henk Van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell Companion to Syntax, Vol 2*. 493-543, Oxford: Blackwell.
- Hoshi, Hiroto. 1999. Passives. In Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*. 191-235. Oxford: Blackwell.
- Howard, Irwin and Agnes Niyekawa-Howard. 1976. Passivization. In Masayoshi Shibatani (ed.) *Japanese Generative Grammar (Syntax and Semantics 5)*. 201-38. New York: Academic Press.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 (上) 統語構造を中心に』東京: 大修館書店.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- Kitagawa, Yoshihisa and S.-Y. Kuroda. 1992. Passive in Japanese. Ms., Indiana University and University of California, San Diego.
- Kubo, Miori. 1989. Japanese Passives. Ms., MIT.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

- Kuroda, S.-Y. 1979. On Japanese Passives. In George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. 305-347. Tokyo: Kenkyusha.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Washio, Ryuichi. 1989-90. The Japanese Passive. *The Linguistic Review* 6, 227-63.

261-0014 千葉県美浜区若葉 1 - 4 - 1

神田外語大学

言語科学研究科

hasegawa@kanda.kuis.ac.jp